

余は、綠蔭幽かなる閑靜裡瀟灑麗なる氏の風姿に接して冷へ切つた麥湯をすゝめられて、忽ち暑熱を忘れ、次で要件の談に入る。

〔島氏〕

光悦といふ人は實に偉い人だつたれ、光悦のためならば誰でも力を注ぐだらう。谷本君の言はれるやうに是非光悦會を組織して諸種の事業を計畫して貫徹を期したまへ。「今光悦」の名ある神阪君を知つておますか、……それでは僕が紹介をするから、同君に會つて話したまへ、僕は近日湯淺半月君にも會ふから談じて置かう、又高安(月郊)君にも手紙を出して置くから、君からも賛成しろと言つて遣りたまへ。杉林古香君の死んだのは惜しい。

と言つて大に乗り氣に成られた。其後又氏を訪ひいよゝ光悦會成立となつて、九月十六日に光悦寺で發起人會を開く段取りになつたが、氏は學校の都合で出席が出来なかつた。

其後尙しばしば氏を訪問し、氏も兩回に涉つて光悦寺へ遊びに來られたから、會のため種々指導援助を請ふたが、去年の夏訪ふた時には、氏の邸宅は全部改築されて居て、詩仙堂に彷彿たる面影はなかつた。改築の理由を尋ねても氏は明かに答へられなかつたけれども、附近の樹木が皆大きくなつて二階建てにせなければ遠景が見へず鬱陶敷

もあり且光線や間取りの都合にもよること、推察した。案内によつて階上階下拜見に及ぶと客間、書齋、臺所、勝手廻りなど總てが便利よくなつた。

松本文三郎博士は銀閣寺北の山中、島博士が同寺南の山中、同じく遠く俗塵を去つて讀書三昧、四邊には如意嶽嵐しの清高な風が吹いてゐる。

島博士性高雅、談話交際頗る淡泊で風流界に於ても頗る持てるといふことは先年物故した矢野友一學士から聞いたことで、教官として學生間の信望が多であることは、海野信行學士から聞いた事である。いづれも、しかあるべきことだらうが唯博士が今以て獨身生活を續けて居られるのが不可解である。(八、六、二七)

六六、光悦寺住職 樋ヶ潮圓師

(光悦は觀音の化身である)

光悦寺住職樋ヶ潮圓師は石見國の人、曩きに同國妙正寺住職であつたが、大正六年十月前田師の後を襲いで光悦寺に來任せられた。

樋ヶ潮圓師はよい御寺様であるけれども余等と同じく所謂口無調法の方で人情を吸むこと甚だ拙であるから他から誤解を受けられることもないでもないからう。併し余は時々光悦寺に行つて、だんぐ師と語り合ひ師の學問人格について大體の了解を得てゐるのである。師の光悦談は法華經信者としての見地から頗る堂に入つたものがある。

〔樋ヶ潮圓師光悦談〕

私は無趣味なものですが取りたて、言はうなら讀經と讀書とです。讀書は若い時分から随分やつたもので徹夜して讀み耽ることも珍らしくないでした。今はぶしやうに成つて餘りやませぬが讀經は如何なる日でも缺かませぬ。讀經をせぬと氣分は能くありません。法華寶塔に對して木魚を叩いて讀經をしてゐますとおのづから心が澄み淨り俗念が去つて何とも言へぬ清淨な爽快な氣分に成ります。一たい人間の心は縁に引かれて種々に變化するもので、善人の談話を聞くといふ行をする氣に成り、金もうけ話を聞くと言ふ金がほしくなり、食物の話や聞き、い物が食いたくなり。見るにつけ、聞くにつけ種々な心が起りますやうに人の心は縁に引かれ境によつていかやうにでも成り行くものですが、讀經をしてゐる時の心的状態は清淨なものはありません。

光悦翁が此の閑靜幽雅の境致を選んで、に讀經の三昧に入られた其心のいさよさは格別なものであつたでせう。愚僧は毎朝本堂に於て寶塔及宗祖に對して法華經の方使品、神力品、普門品、壽量品、を讀誦し光悦翁の靈位(木像)に對して

は方便品と普門品又は方便品と壽量品を讀誦して居ります。光悦翁は當寺の開基であるばかりでなく當寺の維持もおのづから光悦の遺徳によること多大でありますから特に毎朝讀經供養を致しますが命日(三日)には朝晝夕の三回讀經して居ります。一たい光悦なる人は觀音の化身であります。觀世音が妙秀の母體を假りて光悦となつて出現せられ美術工藝や宗教上に衆生を益し後世を感化しやうとせられたに外ならぬのであります。それは普門品(觀音經)を讀むと解りますが、尙誰にでも解るやうに詮じつめて言ふと妙秀光悦の如きは法華經を色讀(身讀)した優婆塞優婆夷であります。

と極めて取り付きの悪しきぶあいさうな師は宗教上の事、宗學上の事になると其造詣を披露して興起り趣湧くものゝやうで、問ひつ推しつするのだんぐ得意氣な調子の昂上が見へるが、流石に宗教家だけに談中虛偽修飾がない。光悦寺の景勝を賞し翠綠艶紅を捉へて半日の快を遣らむとする雅客は即ち巧言令色の住持を喜ぶやも測り難きも浮華輕薄を嫌ひ眞に光悦の人格を慕うて墓前に拈香し坐談によりて半言だにも益を求めむとするの士女は樋ヶ潮圓師の居山を喜ぶであらう。中を求むるに難き世の中。地下の光悦は果して何れを喜びたまふであらうか。(八、九、一〇)

六七、淨土宗大本山、西山關本諦承師

附 佛陀寺住職 高木德準師

京都市寺町今出川上ル鶴山町佛陀寺は往古洛西朱雀村にあり、人皇六十一代朱雀天皇天慶九年四月十三日位を皇弟村上天皇に譲り洛西朱雀村に閑居して東寺の日藏上人を召され、受戒落飾したまひ、佛陀壽の法諱を受けさせられ、天曆六年八月十五日同所に崩御ましまし、を以て、佛陀壽皇居と號し尋で佛陀寺と稱せられ、後更に村上天皇より大藏院の勅額を賜はれり。村上帝亦康保四年五月十四日同寺に遷幸あらせられ、同じく日藏上人に就きて御落飾あり、御法諱を覺貞と號し奉り、同月二十五日崩御あらせらる。

爾來數百年同寺の盛衰興廢は今之を知るに由なきも、應仁年中には京都九太町柳馬場に移轉せられ、文明八年六月二十七日百二代後土御門天皇より同寺中興邦諫上人に對し勅願所並に淨土宗西谷流に改宗の繪旨を賜ひ、淨土宗に變更せられしが同文明年中又上長者町西洞院に移轉せられ、延徳

年間更に一條鳥丸に移さる。永正五年六月二十六日百三代後柏原天皇より中興二世正孝上人に對して再興の繪旨を賜ひ、享祿二年二月六日足利十二代義晴將軍より境内制札を立てられ、天正十三年十一月二十一日豊臣秀吉より寺領二十六石を寄せらる、續いて元和元年七月二十七日徳川家康より同じく寺領を贈られ、引つゞき徳川秀忠以降代々の將軍より寺領の朱印狀を受けつゝありしが明治七年十二月遂に之を返還す。明治十八年十二月七日内務省より保存資金の内へ金壹百圓下賜の恩典に浴したり。

同寺の記録を按ずるに同寺は足利氏の中世より應仁、永正、延寶、天明、文化の各年間五箇度の火災に罹り、及び四箇度の轉地をなしたるものにして、如上延徳年間一條鳥丸に移りし後ち元和年間現今の地に移轉したるものなり。數度の焼失數度の轉地に古記録什寶漸次悉く鳥有に歸したりしも、唯往昔朱雀村上兩帝の信仰したまひし地藏菩薩像、觀音像並に惠心僧都本尊阿彌陀如來及び繪旨、朱印狀の如きは幸に災禍を免れて今尙同寺に安置保存せり。今其古文書の重なるものを擧ぐれば

〔後土御門院御繪旨〕

佛陀寺爲 勅願所令相承山西谷之法流可奉祈明世明時之聖祥者 天氣如此仍執達如件

文明八年六月廿七日

右中辨政頭

〔後柏原院御繪旨〕

佛陀寺數年退轉之事叙慮歎思食處再興之企 叙感餘不淺依之令任住持職訖彌成出來之思可抽佛法興隆者 天氣如斯仍執達如件

永正五年六月廿六日

右中將

〔足利可竹軒制札〕

禁制

- 一 軍勢甲乙人亂入狼藉事
- 一 寄宿停止事 付伐採竹木事
- 一 諸役申懸事

享祿二年十二月六日

佛陀寺

可竹軒(花押)

〔豊臣秀吉公朱印狀〕

城州深草内貳拾六石事宛行之訖全領知可專寺役事專一也

天正十三

十一月廿一日

(朱印) 一條 佛陀寺

〔徳川家康公朱印狀〕

山城國深草之内貳拾六石之事全可寺納者也仍如件

元和元年七月廿七日

(黒印) 一條 佛陀寺

- (以下本文略寺領は同じく二十六名)
- 元和三年七月二十一日 徳川二代 秀忠朱印狀
 - 寛永十三年十一月九日 同三代 家光朱印狀
 - 寛文五年七月十一日 同四代 家綱朱印狀
 - 貞享二年六月十一日 同五代 綱吉朱印狀
 - 同六代 家宣朱印狀
 - 同七代 家繼朱印狀
 - 同八代 吉宗朱印狀
 - 同九代 家重朱印狀
 - 同十代 家治朱印狀
 - 同十一代 家齊朱印狀
 - 天明八年九月十一日 同十二代 家慶朱印狀
 - 天保十年九月十一日 同十三代 家定朱印狀
 - 安政二年九月十一日 同十四代 家茂朱印狀
 - 萬延元年九月十一日 同

〔朱雀村上兩帝靈牌奉安願書並ニ許可書〕

御靈牌之儀に付願書
一 朱雀天皇佛陀壽大法皇
一 村上天皇覺貞大法皇
右兩帝靈牌之御開基ニテ是迄御靈牌御守護奉申上居候處今般 御靈牌之向悉皆泉涌寺江可相納旨御達シ之趣奉承候然ル處前願申上候 御兩帝者當寺之御開基ニ被爲在候得者當寺之在限ハ御守護申上度志願ニ御座候間何卒從前之通於當寺ニ御守

護之儀御開届被成下候様此段偏ニ奉願上候以上

上京第十二區鶴山町

淨土宗佛陀寺住職

朱雀 專潤

明治九年七月十五日

前書之通申出候依而奥印仕候

京都府權知事横村正直殿

戸長 北村利兵衛

印)書面之趣特別之詮議ヲ以開届候事(以上十五字朱書)

思ふに當寺中興邦諫上人(宣胤卿永正十五年記云佛陀寺者亂後故曉堂和尚道號曉堂爲初代去文明十年戊戌建立文明九年三月十四日佛陀寺邦諫上人參内侍者景順相從 阿彌陀經講釋十五日、十六日、廿三日、廿四日、廿七日、廿九日、講釋結願事了被下御布施益香宮杉原居廣蓋於寶子渡侍者僧次有 御對面之日演說 叙感退出云々)の後土御門院より改宗の論旨を賜ひしより年を閱すること茲に四百四十有三年、住職世代を経ること三十二世、當初は應仁文明戰亂の後を承け、足利氏の政令天下に行はれず、世は宛がら嶋鼻の巷と化して、皇室の式微を嘆すること百餘年、人民塗炭の苦に追はれて宗教の權威亦施すに由なかりければ、住寺經營の難かりしこと推するに餘りあり、爲めに同寺も中興よりして三世以降は頽唐荒廢の免る能はざるものありしにや、其十世に至る

し舊檀の歸信漸く重く新檀の歸依益々加はり講會の設立によりて贏ち得たる基本金も亦次第に多く荒類歳と共に革まり、修復改善徐ろに行はれて漸く面目を改むるに至れり。

師は明治六年尾張國萩原に生れ、甫めて九歳桑門に入り同寺先代仙空和尚に師事し、明治三十二年仙空師隱退後洛西塚原稱念寺住職より同寺に轉職、其後京都北野金泉寺住職及洛西久世安禪寺住職をも兼務し、尙且餘力を以て洛北上賀茂深泥池の、もと寶池寺の跡に淨福寺を開創(新建は法令の許さざる所なれば乙訓大原野村の淨福寺の寺號を移轉せらる)して同地方住民の信佛的渴仰を満たし、其資某師をして第二世の住職たらしむるなど、奔走經營至らざるなきに、剩へ其間宗内の輿望によりて本山粟生光明寺參務の職を兼攝し、毎月六回(四九の日)本山に出仕して宗務に參じ、三代の法主を輔佐して精勵恪勤、人望おのづから身に集まり往くとして可ならざるはなし。

さて此佛陀寺に於ては高木師の盡力によりて曩に大正四年授戒會を勤修し、大なる成功を修めたりしが、這回又同師の信望と檀信徒山根氏の篤志的發起と、光明寺婦人會幹事八木菊子刀自の奔走

までは住持の名さへ之を詳かにすること能はず、亂塵やうやく平ぎて百姓堵に安んずるに至り、さしもに由緒床しき同寺とて、はじめに豊公より朱印狀を交附せられ、爾來二十六石の寺領を下賜せられ、こゝにはじめて舊態を復活することを得たりしなり。不慮の類焼にしばしば遭遇し危難の殺到一再に止まらざりしといへども、兎も角も寺號を承續して以て渡世に甚しき不自由を感ずることなかりしは、是れ往昔兩帝開基の恩澤の然らしむる所にあらずして何ぞ、されど亦宿命の避くべからざるものありて第二十九世寺領を返還したる後は恰も封建藩士の食祿に離れたるが如く、にはかに檀信徒の布施にのみ頼らむとするに至りしは猶ほ舊藩士の他に自活の道を求めむとして市井に彷徨したるに似たるべし。高僧碩徳の來現するに非るよりは新檀の歸附亦容易ならざるものあれば荒廢の復た古に歸らむとするもおのづから止むを得ざる所、さしも歴史ある同寺、舊來の體面を持續し得べくもあらず、貧素に次ぐに窮乏を以てし、辛ふじて伽藍を支持し來りしに過ぎず、第三十二世隆空高木德華師同寺を襲ぎて茲に二十年、當世稀有廉潔の資とて入寺以來銳意同寺の復興を企圖

幹旋と其他多數の援助とによりて五重相傳會を勤修せらるゝこととなり、本山光明寺法主關本諦承師自ら傳燈師として錫杖を止むることを快諾せられ、去る四月一日より六日間無事勤修せられたり余も亦、井狩、木村、杉本、森田仁の檀徒總代諸氏と共に其計畫に參與し、五重會中毎日同寺に出席して事務を輔佐し、且五重の法脈を受け、關本師の説教を聽聞して、心中の汚毒を驚かすの機會を得たり。關本法主はすでに耳順の老齡なるに、法體頗る健爽道がに當代の大徳なれば説教甚だ熱心且巧妙にして一言一句受者に徹底せずんば已まざるの概あり。余は終始非常の興味を感じて傾倒聽聞し啓發する所鮮少なざるものありき。

○安心起行を説かれた中に
人は一たび如来様の御慈悲の懷に居ることを信じたならば、めい、分相應衆生のために力を盡さねばならぬ、死ぬる今はのきは迄活動せねばならぬ、善き行を積まねばならぬ。多くの人は少しばかり善い行をするま直に人に知られやうとする。譽められたがる。其様な微弱な、そのやうな薄弱な、その様な輕薄な精神で大きな善行が出来るものではない。

○二河白道を説かれた中に
貪慾、瞋恚、愚痴、之を人の心の三毒といふ、この三毒を拭ひ去ればならぬ。おのれの身分を知らずして、旨い物を食ひたい、良い着物を着たい、立派な家に住みたい、かうもしたい、

あ、ありがたいと思ふから三毒が起る。三毒の結果終に悪業を働いて、甚しきは家を喪ひ、身を亡ぼすに到る。慎しまねばならぬ。

○五戒の内殺生戒を説かれた中に

生き物を無益に殺すのみが殺生でない、金銭を無益に費さない様着物でも大切に着る様、器物でも大事に取扱ひ、時間でも無益に消さぬ様に心掛けねばならぬ。今こゝに在るかれと檀木で

かれが鳴るか檀木が鳴るか

金さしゆもくの間がなる

と言つた風に叩いて使つたならば、善き音が出て尙且十年でも二十年でも使用が出来る、それをがん／＼と力まかせに叩いたならば、檀木の如きは一時間足らずに毀れるであらう、かれでも終には、よき音色が出ない様になる永く使用に堪得る物を短い間より使へないやうに扱ふのは、これ亦殺生である。廢物も利用するがよい。

といひしが如く、老者といはず、幼者と言はず、優婆夷、優婆塞いづれに對しても、適切の教誡なりしが、一心不乱に説かれつゝあるかと思へば忽ちにして冷靜に復り、儼然動かすべからざる態度を取らるゝかと思へば又忽ち温風の面を吹くが如く、變化縦横自由自在に聽者の精神を操縦して慈愛懇切に説かれしかば、受者はいづれも皆隨喜の涙を垂れて最終の日、師が別れを告げられし時は

つた。翁が謠曲家としての聲名は子供の時から聞いてはゐたけれども翁についてはじめて稽古したのが翁との初對面であつた。

翁は顔面に痘痕のある大男で其時すでに八十歳に餘る年齢だつたが極めて壯健で百歳までも永らへられるだらうとの定評であつた。

性質は膽汁質で豪壯な物に頓着せぬ人であつたから、其聲量の強大なことは余は未だ嘗て比喩すべき人を知らぬのである。其教へ方は、ぶつきらぼうで御世辭もなければ、あいそもなく教へ放しが多いが、時々説示されることあると必ず斯道の根柢に觸れる。

○初學の者は聲はあつたがよい、さうでないも聲量が伸びぬ。

○少し進めば聲は八分目のものだ、皆出すと卑しい。

○おまへは口の先で語つて居る、腹で語へ。お前の聲は弱、強い聲を出せ、人に聞こぬ。

○心を高尙に持たぬと聲も高尙にならぬ。

○語をうたふに巧者ぶらないでよい。内容をよく解して、節通り上手に語へば自然意情の露はれるものだ。

といつた調子、簾から蛇だ。流石大家で如何なる簡易なものでも、易いものとは言はれなかつた、皆六ヶ敷い、一生修行のものだと言つて居られた

一同今更の如く惜別の情に堪へざるものゝ如かりき。(八、四、一二)

六八、觀世流 關目顯之翁

洛北上賀茂の社家士族で觀世流謠曲の大家であつた故關目顯之翁は若年の頃より謠曲に興味深く生産を事とせず、斯道に没頭せられたから、家産を蕩盡せられたと聞いてゐる。生計ために豊かならず、而して謠曲が極めて上手であるにも拘らず斯道に依つて生活の道を開かうともせられなかつたらしく頗る超然たるものであつた。余の家兄が存生中、翁に就いて稽古した關係から、余も亦翁に斯道を學んだ。元來余の父は謠曲に非常の趣味を持つて居つたから、余も子供の時分から聴きなれてゐるばかりでなく、父から教へられ、又能樂など毎度父に連れられ兄と共に觀に行つたので謠曲趣味の系統たる譯である。

しかし余が關目翁の門に入つたのは今から七年前のことであるけれども子供の時分から下地があつたから、無論人の初學のやうでは無かつた。門弟子が次を習ふ時に、今少し六ヶ敷い物をといふと痛く叱り付けられた。如上の風であつたから、弟子を仕立てる事は拙であつたけれども、弟子中上達の人が随分多くて觀世や大江の能樂に地謠に出る人もあり、師匠をしてゐる人もある。

余は翁について三四箇月も習つたら、翁が亡くなられて失望した。翁が亡くなられてからは、翁の弟子であつた西賀茂の醍醐忠貞翁に懇請して同じ流れを吸むことゝした。關目翁には「牙山落」其他數番の自作の謠曲がある。

又翁は存生中、誰が稽古に行つても、頻りに細かい假字を書寫して居られた、人に頼まれて寫して居られたでもなかつたらしいが、何を書いて居られるのか誰が尋ねても言はれなかつた。寫字物が机上にうづだかく、寫字しつゝ教へられた事も毎度の事で謠本を見ずして、謠ひ損じの無かつたのは、道がに修養の深きものあるに皆驚嘆して居つた。

翁は逝去の兩三年前關寺小町を謠つて、謠曲皆傳の免狀を受けられたやうに聞いてゐる。千とせふる神山松にくらぶれば

やそちはいまだ二葉なるらむ

右は翁八十歳祝賀の際の作である。(七、一二、二〇)

六九、角倉了以 孫 角倉玄遠氏

余先年光悦傳編纂中、光悦史料蒐集のため、角倉素庵(了以の子)の末裔角倉玄遠氏を京都市室町通丸太町下ル東側のさゝやかな寓居に訪うて、同家々傳の寶物を見て素庵豪富の當時を偲んだが、昔素庵が安南國王に捧げた文書草稿の素庵の自筆にかゝるもの、及素庵揮毫の「格物」の二大字及素庵が意林庵に贈つた書狀中「二十一日に光悦老人可參之由申候左様候へば不得寸暇候間又々自由ながら二十五日頃まで御延引候者千萬忝可存候云々」の一節を見て懐古の情に堪へなかつた。尙其際氏に左の談話を聞いた。

素庵與一は光悦の書弟子で頗る親密で、互に援助をして居りましたやうで、素庵が所謂嵯峨本を拵へた時などは、光悦の後援最も多大で板下の如きは皆光悦門下生が書いた様に聞いておます、私の家にはもと光悦に關係する家寶が深山ありましたが、文化年間期遠亭(嵯峨)にあり素庵の嗜好によつて建つたもの、變失の際二棟の倉庫灰燼に歸した際多くは其難にかゝつたやうで

あります。明治初年に舊所領を沒收せられ、家を沽却して京都に出る時家財を人に取らせたり、賣却したりしましたので全部なくなつたのであります。云々

玄遠氏年齡五十許、長顔隆鼻音吐明晰對談應答の時、視線對人の頭上を去ること尺餘、言動洒々落落極めて輕快の奇人である。氏の寓居の前に富豪男爵三井高保氏の巨然たる邸宅がある。彼是對照今昔を俯仰して感慨に堪へない。

這回京都市に於ては又も市區改正計畫せられ、市周循環大道路の建設や、他に電車線の敷設が遂行されやうとするは至極結構な事である。しかし氏の祖先の了以翁が開鑿せられて三百年の久しき水運の便を興へ、市民を益し市内の風致上より見ても保存したくあるべき史上に有名な高瀬川を埋立て、小暗渠にせんとする議もあるやうだ。如何に現實の世なればとて、さりとて、ちと思ひ切りがよすぎるでは無からうか。余は舊都の史蹟は大なる害のあらざる限り保存したく思ふ。玄遠氏昨今の感懷や果して如何、嚙保存派の勝利となれば良いがと思はせられることであらう。

(九、一、三二)

七〇、三笑軒主と無名氏

三笑軒主、平生光悦の人と爲りを景仰し、我れを忘れて讚評を恣いまくす。或人、軒主に對ひ「足下の如き光悦を讚評するの資格ありや」と詰れば、軒主稍昂奮の面持ちにて口角泡を飛ばして辯解す。著者側にあり、其概要を手記せり。軒主自ら己れを卑下する所は、稍謙遜に過ぐるの嫌ひあるのみならず、少し矛盾の點も無きにあらざれ共光悦の眞價を定めんとする所、追がに一見地ありといふべし。

〔三笑軒主光悦讚評〕

不肖(軒主)の如きは素より光悦翁を讚評すべき資格あるものにあらず、

○光悦翁は夙に塵俗を離脱し、心胸面目、光風霽月の如く、人をして宛がら芝蘭に接するの感あらしめたり。不肖の如きは俗中の野陋にして而かも世上に容を求めて容れられざる者なり。これ不肖が翁を讚評すべき資格なきの一也。

○光悦翁平生一を抱いて中を履み聲聞情に過ぐるを恥ぢたりしも不肖の如きは放心妄想死馬の骨を敷へて動もすれば名利の奴たらむとする者なり。これ不肖が翁を讚評すべき資格なきの二也

○光悦翁平生寡黙にして心中幾多の神秘を藏し、若し口を開けば寸言世を警め、寸鐵人を刺すものありしに、不肖の如きは妄り

に筆舌を弄して、而かも毫髮世を益し、人を動かすに足るものなし。これ不肖が翁を讚評すべき資格なきの三也。

○光悦翁の宗教的信仰は精神的遺傳より母妙秀の胎教に始まり、百磨千鍊の功を積んで終に牢手として動かすべからざるものありて、其信念は遺憾なく其言行遺作に露れたり。不肖の如きは昨には知者の甲論に酔ひ、今には愚者の乙駁に服し、朝に丙駁にさまよひ、夕に丁路に迷はんとするものなり。これ不肖が翁を讚評すべき資格なきの四也

○光悦翁唯皇室のみ崇敬する事を知るも、將相碩儒をも物ともせず、己れを枉げずして眞を吐き、金と鉛を同一にして現代の所謂アモクラシーを實行したりしに、不肖の如きは高貴の前には恭敬の度を過ごし、賢傑の前には畏怖して物をだに得言はざる者なり。これ不肖が翁を讚評すべき資格なきの五也

○光悦翁古を慕ひ、故を温むる志念の強きものありしが、敏く新を知るの明も亦これありて、よく其世の機運に投和し、嶄新一頭地を抜きたりしは其藝術が遺憾なく之を證明せり。不肖の如きは、古を知るの才に乏しく、而かも世運に後れて世の嗤笑を受けむとする者なり。これ不肖が翁を讚評すべき資格なきの六也。

○光悦翁其餘技として樂みたる諸種の藝術に於て、皆其心核を貫かすんば已まざるよりも、更に進んで心核を捉へて之を易置し得たる天才なりしに、不肖の如きは苦しんで一藝を學び、而かも其小體をすら嘗むること能はざるものなり。これ不肖が翁を讚評すべき資格なきの七也。

之を要するに光悦翁は希世の殊尤、不肖の如きは斗筲の愚凡、翁は懸天の日月、不肖は池中の小龍、相距り相異ること甚だ大

なりといへども不肖が翁を追慕憧憬の熾烈なるに至りては何人にも後れを取らざるなり。

無名氏も亦常に光悦の驚異なる人格に傾倒して眷戀措かざるものゝ如く、問はざるに語られし自慢の光悦談は左の如し。

〔無名氏光悦談〕

○光悦の名

一光悦といふ名は眞に良い名ではないか、訓讀すると「ひかりよるこぶ」だ。其意味も善いが「くわうゆつ」と響く音が頗る愉快では無いか、何となく、がらりとして、そして無限の温か味を感じしめる。

○鷹ヶ峰の地名

一鷹ヶ峰といふ地名は、光悦が其地に隱栖以前から名づけられてゐるのだが、何となく崇高な感じを起さしめる。光悦の棲まれた地に應しい名では無いか。況して其地が高燥であつて風景の善いばかりでなく、其自然がすべて、所謂光悦式であるのが頗る妙だ。光悦と鷹ヶ峰はよき配偶奇合を得たものである。

○光悦の自信

一光悦といふ人は、物かす言はずして、そして心致の寛濶な人であつたらしい。人と談じ合つても、がらりと腹がしく高笑ひなんかせなかつたらうが、常に微笑を含んで友と語り合ひ、上宮太子の盛徳や、菅公の清浄な心や、日蓮上人の金剛不退轉の信仰や兼好法師の風雅や、蘇東坡の文章などには、いつも賞讃の辭をのべて居つた事であらう。争心の強くない人だつたらうが、自ら信すること極めて厚く、かの天才肌の賈誼なんかを

だらうが、どうしても天才の大藝術家であつた。それは能く畫かうとも、立派に拵へやうとも思はずして、そして出来た物に言ひ知れぬ高い気分と巧妙な意匠技巧が躍動してゐるからである。光悦の作品のすべては其深遠崇高な趣味の結晶である。

○横着な光悦

一宗達等が丹誠をこらして畫いた巻物の上に、遠慮會釋もなく文字を揮毫した所なんかは、光悦といふ人は一種横着な人とも見られる。俗に所謂人を三文とも思つてゐないのかとも怪しまれる。人に贈つた書簡でも邪覽臭ささうな書き振りで無いか。

○光悦を偲ばんとせば

一夏の日中訪ひ来る人も無きまゝに、太虚庵の窓や障子を、あけ立て、蟬の聲を聞きつゝ、軒端のあじさいの花の涼風に吹き散らさるゝを打見やりつゝ、仰臥して、華胥の郷に遊ばんとした光悦當年の心持や。秋の夜の月明に靜かに椽端に匂ひ出で、語らふ友も無きまゝに、新羅三郎の足柄越や、安陪仲慶異域の思出や、烏鶺南飛の曹操の詩などを思ひ浮べた時の心持や、大疊積つて一尺、四顧寂として太古の如き銀世界の冬の朝、屏風襖を立て廻した室に燈を擁して、裏山の鹿や兎、さては山鳥すゞめのやからが時の寒さや如何ならんを陰かに同情を寄せつゝ、一服の茶味に我れを忘れた心的状態などは格別のものであつたらう。かうした太虚庵主人の昔を偲びに来る人の夢にだになきは何たる無心の事であらう。毎年秋の茶會にのみ參會しただけでは、又花や紅葉や秋草の美を賞鑑に罷り来たただけでは、光悦の鷹ヶ峰に於ける生活状態を偲ぶには物足りない。藪中のふくらう鳥の聲、あたりの山に猪逐ふかりうごの犬にけし掛くる聲、雉の音、たまさかに狐の鳴き聲など聴かでは、浮世離れた鷹ヶ峰の

窮れ儒者との、しつてゐるし、林羅山なんかをも眼下に見て居つた。太閤秀吉を評して「高慢で我れを忘れ、つまりは政道を執つて、君と神との爵を蒙つた人だ」と罵倒してゐる。時々おほ、くさ笑ひ興じた聲なんかは、言ひ知れぬ快い情調を表はしたものであらう。

○光悦の心底

一光悦は無論、雅人であるが、高士であり、又豪傑であつた。それだから平生は知らぬ顔でさげた調子だから其心底は容易に測り知ることが出来ないが、いざ國家の危急存亡の場合でも見極めたら、分相應あらん限りの力を盡して、君國の犠牲に成る事は覺悟して居られたやうだ。無論楠公のやうな六韜三略は無からうが、精神に於ては同じであつた。

○光悦の人格

一光悦は當時第一流の諸名士と交遊して居られたが、それらの名士を毫も畏れて居られなかつた。否、人からは少なからず畏れられたのである。しかし、それでゐて誰にでも親しまれ懐かされたのであつた。こゝが即ち光悦の人格として最もすぐれた所で、他の追隨の出来ない點であらう。

○光悦の作品

一光悦の筆蹟をはじめ、其作品のすべてを見るに、氣隨氣儘な豪大な調子に打たれ、さながら何物かが人間の手を假つて拵へたやうに思はれもするが、又一面にあつさりとした、さげた肩托の無い、そして同情のありげな所に、思はず知らず引き付けられる。

○光悦趣味の結晶

一光悦は高士であつたから、藝術家と呼ばれたら地下に笑苦する

光悦の境涯など想像の出来得るものではない。京都市から二十町足らず自動車ならば十分間に來られるかうした仙境閑地を餘所にして、名こそ粹なれ俗なく、衣笠や岡崎に別業を設けて幽雅の趣を得たりと自慢願する人の心が解らない。

○光悦は古來四傑の一人

一何？ 僕は光悦を褒めてのみ居るつて？ 光悦は眞に褒めるのみで足りる人だ。誰しも光悦ばかりは悪口を言いたらう。強いて光悦の悪口を言はうなら、無頼着な所だ、書畫巻物に誤字なんか書いた事が後に氣付いても、直さうとせせず平氣な點だ。これまでも物の大局をのみ誤らざらむとするから起る小瑕瑾である。悪評する點が無いぢやないか。光悦は日本史上の第一流の人物だ。僕は光悦を、大石良雄を、吉田松陰を、西郷南洲を日本の四傑として崇拝してゐる。此四人は偉大にして崇高な人物である。氣概もあれば涙もある。其所行蔵は自分一個の身をのみ考へて居ない。聖人と一致する點がある。

○光悦神社を建てるべしだ

一大石神社と松陰神社とは、すでに出来てゐる。光悦神社を鷹ヶ峰に建てるべしだ。そして美術工藝の神とすべしだ。

光悦談叢終

11
367

大正九年八月一日印刷
大正九年八月五日發行

不許
複製

編輯者

森田清之助

印刷者兼

京都市上京區寺町二條南十九番戶
山田直三郎

發行所

京都市寺町二條南
會社名 芸 艸堂
長電上二九〇番
振替大阪二五八番

發行所

東京市本郷區湯島一丁目一番地
會社名 芸 艸堂 支店
長電下谷七五三〇番
振替東京四〇九四〇番

終

